

# 博士論文要約

立命館大学大学院社会学研究科  
応用社会学専攻博士課程後期課程

イノウエ タツロウ

井上 達郎

## 1. 博士論文の題名

「ハンナ・アレントの「私的領域」論—「共通世界」の安定的な存立を保障する思想として再構成する—

## 2. 本研究の主題と目的ならびに章構成

本研究の主題は、20世紀の政治・社会思想史における独創的な思想家として注目されてきたドイツ系ユダヤ人女性思想家ハンナ・アレント (Hannah Arendt: 1906~75) の「私的領域 (private realm)」論を考察することである。その目的は、従来の研究において看過されてきたアレント思想における「私的領域」概念の積極的な存立意義を解明し、彼女の「私的領域」論を「共通世界 (common world)」の安定的な存立を保障する思想として再構成することで、アレント研究における新たな解釈視点の所在を提示することである。本研究は、序章・終章を含めて計6章の論文から構成されている。各章の目次は以下の通りである。

序章 本研究の目的と章別構成

1. なぜ今、ハンナ・アレントを読む必要があるのか
  - (1) アレントは何を考えたのか—「政治」の意味をめぐって
  - (2) なぜ今、アレントなのか—21世紀における公共性論の理論的課題によせて
2. なぜ、アレントの「私的領域」論に注目する必要があるのか
  - (1) 未開拓の研究領域としてのアレント「私的領域」論
  - (2) アレント公私区分論に対する批判的解釈への疑問
  - (3) 「共通世界」の安定的な存立を保障する思想  
—アレント「私的領域」論の積極的な存立意義の解明を目指して

3. 本研究の章別構成

【序章 注】

第1章 アレント研究史の批判的検討—「私的領域」概念解明の必要性について

1. アレント研究史の概観
  - (1) アレント研究第一期—「共和主義的」解釈と「実存主義的」解釈の相克
  - (2) アレント研究第二期—アレント公共性論の「近代的」再構成の試み
    - ① 「判断力」論に着目した「活動」概念の基礎づけ
    - ② ハーバマスによるアレント「活動」概念の批判的受容
  - (3) アレント研究第三期—公共圏における「統合」に対する「抵抗」する政治
    - ① D・ヴィラによるアレント活動論の解釈
    - ② フェミニズム思想におけるアレント思想の受容 —B・ホーニグの「闘技的フェミニズム」
2. アレント思想における「私的領域」概念解明の必要性について

- (1) アレント研究第四期?——近年における注目すべき研究動向について
- (2) アレントの「私的領域」概念に着目した先行研究の検討①  
——M・カノヴァン、E・ザレツキー、S・ベンハビブ、佐藤和夫らの諸解釈
- (3) アレントの「私的領域」概念に着目した先行研究の検討②  
——R・フラスマン、H・ミューズらの諸解釈

### 3. 各章で考察する主題の提示

#### 【第1章 注】

## 第2章 「世界の中の住処」としての「私的領域」——アレントの「私有財産」論

はじめに

- 1. アレントの「私有財産」論
  - (1) アレントの公私区分論
  - (2) アレントの「私有財産」概念の特徴
  - (3) 「私有財産」と関連づけられた「私的領域」の存立意義——「世界の中の住処」について
- 2. 「私有財産」の解体と「私的領域」存立の危機① ——アレントの近代所有論批判
  - (1) 近代所有論における「財産」と「富」の混同
  - (2) ロックの労働所有論に対する批判
  - (3) マルクスの労働理論に対する批判
- 3. 「私有財産」の解体と「私的領域」存立の危機② ——アレントの「徴用」批判
  - (1) アレントの「徴用」概念
  - (2) 「徴用」の現代的進展に対する危機意識
- 4. 現代社会における「私的領域」存立の危機に抵抗して
  - (1) 晩期アレントの「私有財産」論
  - (2) アレント「私有財産」論が提起する問題をどのように引き受けることができるか?

小括

#### 【第2章 注】

## 第3章 「思考する個人」の在処としての「私的領域」——全体主義批判から道徳哲学論へ

はじめに

- 1. アレントの全体主義論——「私的領域」概念との関連から
  - (1) 全体主義的統治の特徴① ——「全体的テロル」による「私的領域」の破壊
  - (2) 全体主義的統治の特徴② ——「イデオロギー」の内的強制による「思考」の麻痺
  - (3) 「見棄てられていること」と「単独であること」の区別をめぐって
  - (4) 「個人的なもの」の在処としての「私的領域」
- 2. 道徳哲学論の考察に至る二つの契機
  - (1) ドイツ社会における二度に及ぶ道徳的秩序の崩壊
  - (2) アイヒマン裁判を契機とした「悪」をめぐる認識の深化——アイヒマンの「逆立ちした良心」
- 3. アレントの道徳哲学論——全体主義に対する「個人的」抵抗
  - (1) ソクラテスの命題——道徳的な「原理」としての「みずからとともに生きること」

(2) 「自己」との「対話」としての「思考」の特徴

(3) 全体主義に対する「個人的」抵抗——「道徳的判断」に基づいた「不服従」の力について

小括

【第3章 注】

#### 第4章 子どもの「新生」を通じた「世界」の再生と持続——アレント教育論の思想的含意

はじめに

1. アレント教育論における「新生」概念の特徴

2. 1950年代アメリカ社会における「教育の危機」

(1) 大人たちの「世界に対する責任」の放棄——「リトルロックについての省察」をめぐって

(2) アレントの「進歩主義的」教育批判

3. アレントのいわゆる「保守的」教育論の思想的含意——「権威」概念に注目して

(1) アレントの教育的「権威」概念——大人が担うべき「世界に対する責任」について

(2) アレント教育論の思想的含意——子どもの「新生」を通じた「世界」の再生と持続

4. アレント教育論における「私的領域」概念の積極的意義

(1) 子どもの教育における「私的領域」概念の存立意義について

(2) 「学校教育」に先立つ「家庭教育」の意義をめぐって——教育哲学者の見解を参照して

小括

【第4章 注】

#### 終章 本研究の結論と今後の課題

1. 本研究の結論

2. 今後の課題にむけて

【終章 注】

引用・参考文献

初出一覧

### 3. なぜ、アレントの「私的領域」論に着目する必要があるのか？

「なぜ、今アレントを読む必要があるのか」——それがアレントの研究を始めて以来、筆者を悩ませてきた問いであった。政治学や社会学といった学問分野において、アレント思想の現代的意義としてしばしば語られてきたのは、主に『人間の条件』で展開されている「活動 (action)」概念を中核的概念とする彼女の政治的行為論（公共性論）である。そしてアレントの公共性論は、国家や市場経済の領域に対抗する自律的な行為領域としての公共空間を構想しようとする市民社会論や、民主主義社会における政治的停滞を克服するべく市民の自発的な政治参加を強調する参加民主主義論といった文脈において注目されてきた。このように現在、政治学や社会学において、ハンナ・アレントと言えば「公共性の思想家」であるという認識が定着しつつあるように思われる。

筆者としても、アレント思想において主題となる最重要論点とは公共性論だということ、そして公共性論の探究が、現代社会における政治的な危機状況と批判的に対峙するうえで喫緊の理論的課題であることに疑義を差し挟むつもりはない。しかしながらその一方で、アレント思想への関心が彼女の公共性論へと収斂するあまり、公共性論の解釈枠組みでは十分に捉えることができない／看過されてしまう論点もまた存在するのではないかとい

う疑問がつねに念頭にあった。中村健吾が指摘するように、主にJ・ハーバマスの公共性（圏）論に依拠してきた20世紀の公共性論が議論の前提としてきた政治的行為者としての「市民」概念——理性的な討議に基づいた民主的な合意形成を志向する「市民」像——は、「既存の公共圏から排除されている〈他者〉の存在」への応答に迫られている21世紀の「公共圏をめぐる新しい問題構成」を前に、今やその妥当性を失効しつつある（中村2014:97-8）。21世紀の公共性論が直面する「市民」概念の再審の背景には、人間が「市民」として公共圏に現われるための諸々の前提条件そのものが掘り崩されつつあるという深刻な問題状況が存在していると言える。「市民」とは誰なのか。誰が、どのような資格において政治に参加することができるのか。今日、公共性論において問われるべきは、公共圏を構成する「市民」の在り様のみならず、「市民」として公的に現われるための前提条件そのものである。そしてこの点を考察するにあたって鋭い洞察を指し示しているのが、アレントの公私区分論だと言える。

アレントの公私区分論の特徴を、古典的政治学におけるポリス/オイコスの二分法に基づいた「硬直した概念的二分法」として批判したJ・ハーバマスによる解釈（Habermas [1976]1983=1984）に影響を受けた研究史上の通説的解釈では、アレントの思想において「公的領域」と「私的領域」との関係性とは、「私的領域」に対する「公的領域」の優位性と両者の排他的関係性の強調にあると指摘されてきた。アレントにとって「私的領域（private realm）」とは、労働と生殖を通じた「生命の必要性」の充足を主要目的とする家族の生活領域を意味するものであり、それは「公的領域（public realm）」との対比のもと、「活動（action）」を通じた「他者との共生」という真に人間的な生活とされる「政治的生活（*bios politikos*）」への参加を「奪われた（deprived）」生活様式として否定的かつ軽蔑的に理解されていると見なされてきた。これまで多くの論者は、ハーバマスによる批判を議論の前提に据えたとうえで、ポリス/オイコスの二分法に規定されたアレントの公私区分論の概念的有効性に疑問を提起し、「私的領域」に対する彼女の理解の狭隘さを批判してきた（Jay 1978=1989; Pitkin 1981; Bernstein 1986; Hansen 1993; Gottsegen 1994; 川崎 2010）。

しかしながら、アレントの公私区分論に寄せられたこれらの通説的解釈では、公私区分論において提起された彼女の重要な思想的洞察を把握することができない。そしてその原因は、アレントが「私的領域」に付与した積極的な存立意義を看過しているからである。注意深く読み取るならば、アレントの公私区分論には、「私有財産（private property）」論という彼女の独創的な「私的領域」論が提示されているのである。アレントが公私を区分したことの理由とは何か。それは従来の解釈が示すように、「私的領域」に対する「公的領域」の優位性を主張し、両者の排他的関係性を強調するためではない。なおかつ、E・ザレツキーが鋭く指摘しているように、アレントの公私区分論は、私生活を尊重する一方で公的生活に重点を置かない近代リベラリズムの公私区分論や、個人の私生活を政治的共同体が掲げる共通の目標に従属させることを求める共和主義的な公私区分論とも異なるものである（Zaretsky [1995]1997=2001）。

アレントが「私的領域」に付託した積極的な存立意義に着目しつつ、彼女の公私区分論を読み解くと、彼女が公私を区分することで提起しようとした次のような洞察を理解することができる。それは「公的領域」と「私的領域」は、それぞれ「自由（freedom）」と「安全（security）」という異なる構成原理を有するがゆえに概念上は厳密に区別されなければならないが、双方の領域は、人間が「自由」な存在として「世界」の中で生きるために不可欠の「人間の条件」を構成しているということである。アレントにとって「私的領域」とは、一方で「生命の必要性」に従属した家族生活の領域であるという「厳然たる事実」を含意しつつも、他方でそれは、他者に見られ聞かれるという意味での「公的な現われ」にふさわしいかたちには転換しえない人間の活動力や関係性を隠し保護することで、人間生活に固有の「深さ（depth）」の次元を保障する「秘匿性の空間」として積極的な存立意義のもとで捉え直されるべき生活領域でもある。さらにこの「秘匿性の空間」としての「私的領域」とは、「自己（self）」に深みをもたらし、守られる居場所を与え、育み、そして、公的領域へと現れ出るのにふさわしい個人

(individual) へと成長させる」場としての「ホーム (“home”）」(Benhabib 1996: 212-13)、ないしは「公的な行為者 (public actors) が出現するための隠された土台 (“hidden ground”）」(Mewes 2009: 88) でもある。アレントの思想において「私的領域」とは、「公的領域」で実現される政治的公共性を支える不可欠の生活領域として根本的に重視されているのであり、それゆえ「公的領域」が成立するためには、「私的領域」の安定的な存立が保障されなくてはならない。公私区分論でアレントが主張していたにもかかわらず従来の解釈で看過されてきたのは、人間の「自由」ならびに「複数性」を根源的に擁護しようとするならば、「公的領域」の存立意義ならびにその形成可能性を追究するのみならず、上述したような積極的な存立意義を有する「私的領域」の安定的な存立をいかにして確保しうるかという問題もまた避けることができない課題だということであった。この点について研究史上早い時期から、アレントの「私的領域」概念に着目する必要性を訴えてきた数少ない論者である佐藤和夫が、最近の著作のなかでその理由を、『人間の条件』の章別構成と関連づけながら以下のように明快に指摘している。

アレントは、『人間の条件』において「活動的生活」についての分析をおこなうと宣言しているが、彼女が「労働」「仕事」「活動」という三つの「活動的生活」についての叙述を始める前に「公的領域と私的領域」という章をおいているのには深い動機がある。それは何よりも「公的領域」の営みとしての「活動」の意味を位置づけることと並んで、そもそも「公的な」活動が可能になるための「私的領域」についての意味づけの重要性を強調することである。しかも、この私的領域自体が近代になって、公的領域に劣らず「社会的なもの」、言い換えれば、この現代を席卷する市場とカネの支配によって危機におちいつているという基本的な問題を問おうとしたのである。(佐藤 2017: 91)

上記佐藤の用語を借りれば、これまでのアレント研究史とは、専ら『「公的領域」の営みとしての『活動』の意味を位置づけること』に専念してきたと言える。その反面、『「公的な」活動が可能になるための『私的領域』についての意味づけの重要性』については十分に考察が深められてきたとは言えないのではないかと。21世紀の公共性論を構想していくうえで、「市民」として公的に現われるための前提条件を剥奪されることで「既存の公共圏から排除されている〈他者〉の存在」をもはや無視することができないのだとすれば、公共圏の成立を支える重要な前提条件である「私的領域」の安定的な存立をどのように確保し保障していくのかについて真摯な理論的応答が迫られていると言えるだろう。アレントの公私区分論に寄せられた通説的解釈を批判しつつ、彼女の「私的領域」論をその積極的な存立意義のもとで捉え直すことを通じて、この問題に応答するための何らかの思想的含意を導き出すことはできないか。この点に、本研究に着手した筆者の執筆動機が存在するのである。

#### 4. 各章の要約

序章では、本研究の主題がアレントの「私的領域」論の考察であることを示したうえで、アレント研究において、彼女の「私的領域」論に着目する理由を三点提示した。その理由としては第一に、アレントの「私的領域」論に着目した先行研究の不足が挙げられる。研究史を概観することで浮かび上がるのは、主要な研究動向が「私的領域」概念の存立意義を看過したうえで、専ら彼女の公共性論の解釈をめぐる展開してきたという経緯である。第二に、J・ハーバマスによるアレントの公私区分論批判に影響を受けた研究史上の通説的解釈への疑問が挙げられる。この解釈では、アレント公私区分論に見られる顕著な特徴が、「私的領域」に対する「公的領域」の優位性と両者の排他的関係性の強調にあると指摘されてきたが、このような解釈は、「私的領域」概念の積極的な存立意義を看過した一面的な理解であると言わざるをえない。第三に、アレントの公私区分論に対する通説的解釈が看過した彼女の「私的領域」論を、その肯定的で積極的な存立意義に着目して再構成することで、「人間の条件」

をめぐって、言わば「共通世界」の安定的な存立を保障する思想と呼ぶべき彼女独自の洞察を明晰に把握することが可能になる。アレントの思想において「私的領域」とは、「世界」の中で生きる人間の生に固有の尊厳や能動性を育むことで「共通世界」の安定的な存立を支える生活空間として根本的に重視されているのである。

第1章では、アレント研究史の全体的な動向を、その展開に応じて四つの時期に区分したうえで、各時期の研究動向に見られる解釈上の特徴について概観した。研究史を概観することで浮かび上がるのは、主要な研究動向が、専ら彼女の公共性論の解釈をめぐって展開してきたということである。とりわけ『人間の条件』で提起された「活動」概念の解釈に専念してきた従来の諸解釈を批判し、それとは異なる観点から彼女の思想的意義を再考しようとしたM・カノヴァンの先駆的研究(Canovan 1992=2004)を嚆矢とする第四期研究の諸動向においても、アレントの「私的領域」論は解明されるべき主題として受けとめられているとは言い難い。むろん数少ないとはいえ「私的領域」論に着目した研究も存在しており、第2節では、アレントの「私的領域」論を考察した代表的な先行研究について検討し、次章以下で考察を試みる主題を導出した。そのうえで本研究において、アレントの「私的領域」論をその積極的な存立意義のもとで捉え直すための基軸的論点として、(1)「私有財産」論、(2)「全体主義」論ならびに「道徳哲学」論、(3)「子どもの教育」論、の三点を設定した。これらの論点を主題としたのは、ここで検討した先行研究では、これら三つのうちいずれかの論点に着目しつつ「私的領域」概念の意義について考察がなされているからである。個別の論点に着目して「私的領域」概念の重要性を指摘するに止まってきた従来の研究に対して、本研究はアレント研究における新たな思想的地平を開示するためにも、彼女にとって継続的かつ中核的な思想的省察であったと見られる「私的領域」論の総体的な解明の必要性を提起するものであるが、上記三つの主題の考察は、そのための不可欠の基礎的考察として位置づけられるものである。

第2章では、アレント思想における「私的領域」概念の積極的な存立意義を解明するために、彼女の「私有財産」を考察した。本章での考察を通じて明らかになったのは、アレントによる「私有財産」概念のきわめて独創的な解釈である。それが独創的なのは、彼女において「私有財産」が、この用語によって通常想起されるような、貨幣、商品、資本といった「動産」としての「富」とは根本的に異なるものとして理解されているからである。アレント思想において「私有財産」とは、「富」や「資本」といった経済学的範疇に属する概念としてではなく、「公的領域」に対する「四つの壁(防護壁)」として、「私的領域」の安定的な存立を保障するものとして重視されているのである。「私有財産」論の考察を通して明らかになるのは、アレントの思想において「私的領域」とは、「四つの壁」として隠喩的に表現された「防護壁」としての「私有財産」に守られることで、「世界」の中で人間が安心して「住まう」ことができる「世界の中の住処」として積極的な存立意義を持つということであった。「防護壁」としての「私有財産」は、公権力の恣意的な介入や、社会の画一的な価値評価、さらには見知らぬ他者の好奇の眼差しといった「世界の公的側面」からもたらされる様々な脅威を遮断することで、「私的領域」の存立を保護するものである。ここには、私的に所有することが許された「隠された」空間を持つことが保障されてこそ、人間は「世界」の中で「人間らしく」生きることができるという、「人間の条件」をめぐるアレントの思想的確信が見出せる。従来の諸解釈では看過されてきたが、「世界の中の住処」としての「私的領域」の安定的な存立を擁護することこそ、公私区分論におけるアレントの重要な思想的洞察だったのである。そして、経済的収奪や社会的排除の論理に抵抗して、「世界の中の住処」である「私的領域」の安定的な存立を保護する「私有財産」の保障を訴えた晩年のアレントの問題提起とは、人間が安心して「世界」の中に「住まう」ことができる「私的領域」を確保することが一層困難になりつつある現代社会の問題状況を顧みれば、きわめてアクチュアルな問題提起として受けとめられるべき議論だと言える。

第3章では、全体主義による「私的領域」の破壊という論点に焦点を当てて、アレントの全体主義論について考察した。彼女の全体主義論において、「私的領域」とは、「思考する個人」の在処として、人間の行為のなかで

もともと「自由」で「純粹」な能力である「思考」の能力を、個々の人間の内面において培うことのできる不可侵の個人的空間として根本的に重視されていた。この「思考する個人」の在処としての「私的領域」こそは、全体主義に抵抗するための不可欠の根拠なのである。アレントは、「全体主義」批判として提起した「私的領域」論を、後年の道徳哲学論で思想的に深化させ、全体主義に対する「政治的」抵抗に先立つ「個人的」抵抗の一形態として現れる体制への個人的な「不服従」の意義について着目している。その際彼女が強調したのは、公的な世界から退きこもり、「思考」を「始める」ことで、「自己」とともに誠実に生きることを意志する「個人」が涵養されうる空間としての「私的領域」の意義であった。アレントは、「思考する個人」の在処としての「私的領域」の存立に、政治的な危機状況のもとでの「人間の尊厳」の所在を見出そうとしたのである。「全体主義」論ならびに「道徳哲学」論の考察を通して明らかになるのは、「私的領域」とは、家族生活の領域や親密圏とも概念的に区別された、「思考する個人」という「道徳的人格」が涵養されうる「個人的なもの」の在処として積極的な存立意義を持つということであった。

第4章では、「子どもの教育」をめぐるアレントの議論について考察した。アレントの教育論をめぐるのは、おもに彼女の公共性論に着目してシティズンシップ教育論を展開しようとする論者から、「政治」と「教育」の区別を強調する彼女の議論が「保守的」であるという批判が提起されてきたが、本章ではアレントの教育論を、彼女の「権威」および「私的領域」概念に着目して考察することで、「保守的」と見なされ批判されてきた彼女の教育論の主眼が、子どもの「新生」を通じた「人間社会」としての「共通世界」の不断の再生と持続的存立にあったことを明らかにした。アレントが教育を通して守ろうとしたのは、「新参者」として「世界」に到来する子どもの「新生」であり、それと同時に、子どもの「新生」を媒介とした不断の「更新」に基づく「世界」の存立であった。その際着目したのは、アレントが、学校教育の「公共性」を認識しつつも、「家族」とともに「学校」という教育空間を「私的領域」に位置づけることで、双方の空間を「世界」を「更新」してゆく子どもの能動性を育む庇護的空間として捉えていた点である。「子どもの教育」をめぐるアレントの考察を通して明らかになるのは、「私的領域」とは、子どもの成長と発達のために必要な基本的条件を保障するとともに、「共通世界を新しくする使命」を担う将来の「市民」である子どもの能動性を育成するための庇護的空間として積極的な存立意義を持つということであった。「家族」のみならず「学校」も含めた、子どものための保護的空間として「私的領域」を確立することは、「世界」の再生と持続を主眼とするアレントの教育論にとって不可欠の条件であり、それは子どもの養育と教育に携わるすべての大人たちが、「子ども」と「世界」に対して担うべき「公的責任」と言える。アレントのいわゆる「保守的」教育論は、異なる世代の人間たちによる「共有」と「更新」を通じた「共通世界」の持続的存立という、彼女の政治思想における中心的論点と深く関連する重要な論点なのである。

## 5. 本研究の意義

本研究における一連の考察を通じて明らかになるのは、専ら「公的領域」と「私的領域」の「断絶」のみを強調し、後者を前者の「欠如態」と見なすことで、「私的領域」の積極的な存立意義を看過してきた研究史上の諸解釈とは異なり、アレント思想において「私的領域」とは、「新しい始まり」としての人間の「自由」が発現する舞台である「共通世界」の安定的な存立を支える不可欠の条件として、肯定的で積極的な存立意義のもとで捉え直すことができるということである。

本研究がアレントの「私的領域」論から掬い取ろうとしたのは、「人間の条件」をめぐる以下のような思想的洞察である。それは第一に、人間が「自由な存在」として生きるためには、「活動」を通じて人間の「自由」が現われる舞台である「公的領域」の存立とともに、公権力の恣意的な介入や、社会の画一的な価値評価、さらには見知らぬ他者の好奇の眼差しといった「世界」の「公的側面」からもたらされる様々な脅威にさらされることな

い私的な居場所——「世界の中の住処 (worldly home)」としての「私的領域」——が保障されなくてはならないという彼女の根本的な確信である。アレント政治思想の根本的課題とは、人間の「自由 (freedom)」の根源的な擁護、すなわち「世界」のなかで「他者」と協同しつつ「何か新しいことを始める (beginning something new)」という人間に固有な「活動 (action)」の能力と、「活動」の発現を通じてこそ可能となる「共通世界 (人間社会)」の持続的存立の擁護にあった。そして、このとき同時に彼女が主張していたのは、「活動」を通じた「世界」の「更新」という人間の「自由」が実現されるためには、何よりもまず、様々な脅威から守られた「世界の中の住処」である「私的領域」が確保されなければならないということであった。

第二に、「私的領域」において涵養されうる能動的で肯定的な主体の在りように、「人間の尊厳」を見出そうとする彼女の眼差しについてである。アレントの思想において「私的領域」とは、「公的領域」とは異なる共生の空間として、つまり「公的領域」で出会う他者とは異なる「他者」と、「活動」を通じた「自由」の確証とは異なる方法でともに生きることが許された空間として肯定的な意味のもとで理解されている。彼女は、人間的な生に固有の尊厳や能動性とは、「公的領域」に「現われる」だけでなく、「私的領域」に「隠される」ことによってこそ守られ育まれるということ深く理解していた。それぞれがかけがえのない固有の軌跡を描く人間の生とは、それ自体が神聖にして不可侵の尊厳を宿すものである。しかし、人間の生がそれに固有の神聖さと尊厳とを保持するためには、不可欠の条件として「公的領域」が放つ公示の光から逃れ隠れることができる一定の「暗闇 (obscurity)」を必要とするのである。公示され他者の眼にさらされるべきではない「隠されるべきもの」が適切に保護されることこそは、人間が「自由」な存在として「世界」の中で生きるための不可欠の条件なのである。

「秘匿性の空間」である「私的領域」とは、他者に見られ聞かれるという意味での「公的な現われ」にふさわしいかたちには転換しえない人間の活動力 (思考や善行、子どもの養育・教育) や関係性 (愛や友情) を隠し保護することで、「公的領域」では顧みられない人間生活に固有の「深さ (depth)」の次元を保障する空間として積極的に捉え直されるべきものである。その意味で、「公的領域」において人間が「自由」であるための根本的な条件とは、いつでもそこへと立ち戻ることが許される「安全」な居場所としての「私的領域」の安定的な存立とその保障に賭けられていると言える。今後のアレント研究において解明されるべき重要論点とは、「共通世界」の安定的な存立を保障する思想として肯定的かつ積極的な存立意義のもとで捉え直された「私的領域」論の総体的な解明という論点なのであり、しかもそれは従来の研究史の諸動向が専念してきた、アレント公共性論の理論的精緻化のためにも解明されるべき主題なのである。このように、アレント思想における「私的領域」概念の積極的な存立意義を解明することで、彼女の「私的領域」論を、「共通世界」の安定的な存立を保障する思想として再構成し、アレント思想研究における新たな解釈視点の所在を提示した点に、本研究の学説史的意義があると言える。

さらに言えば、アレントが「私的領域」論において示唆した近代社会における「私的領域」の「剥奪」や「荒廃」という問題は、現代社会において一層深刻な様相を呈しつつあると言える。世界各地で続発する内戦や紛争に伴う難民の増大、市場経済のグローバル化の進展に伴う格差や貧困の拡大再生産、みずからを「無用」で「余計な」存在だと感じる人びとの間に広がる社会病理的現象の蔓延など、現代社会が直面する危機的な問題状況の背景には、人間が安心して生活を営むことができる空間としての「私的領域」が、暴力的な収奪や破壊、際限のない縮小や解体のプロセスに直面し、存立の危機に曝されているという問題が伏在している。人間が「自由」であるための根本的条件とは、安心して生活を営むことのできる「世界の中の住処」としての「私的領域」の安定的な存立に賭けられているというアレントの「私的領域」論が示唆する思想的洞察から学び、現代社会の諸条件のもとで「私的領域」の存立を保障するための方途を問うことは、現在多様な形態をとって進行している「私的領域」の「剥奪」や「荒廃」という問題状況と批判的に対峙するうえで、優れて現代的な意義を持った主題だと言えるのである。



## 6. 今後の課題について

本研究は、アレント思想における「私的領域」概念の積極的な存立意義を解明し、彼女の「私的領域」論を、「共通世界」の安定的な存立を保障する思想として再構成することで、アレント思想研究における新たな解釈視点の所在を提示するものであった。本研究での成果を踏まえたうえで今後の課題として挙げられるのは、ここでは充分参照できなかったアレントの著作・論考・未公刊草稿等にも視野を広げたうえで、アレントの「私的領域」論の総体的解明を目指すことである。そしてこの課題は、アレント研究における新たな思想的地平を開示することにもつながりうる重要な論点だと考えられる。この目的のために今後まず着手すべき課題としては、「社会的なもの」による「私的領域」の解体に関するアレントの考察に着目して、彼女の近代社会批判の論理を明らかにすることが挙げられる。

アレントは、近代において、「世界」の持続的存立を可能とする根本的条件として彼女が重視した「公的領域」と「私的領域」の相補的な並立状況を破壊するものとして、「社会的なもの (the social)」という「第三の領域」が勃興してきたという事実を指摘し、その経緯を批判的に論述している。この「社会的なもの」という概念は、これまでの研究でも指摘されたように、「(資本主義的) 市場経済」やそれを管理・規制する「行政国家 (「国民国家」)」、さらには、国王の宮廷や上流階級のサロンといった「社交的空間」や「大衆社会」など、政治・経済・社会文化的側面から多義的な含意をもっており、難解とされる彼女の諸概念のなかでも、とりわけ整合的な解釈が困難な概念と見なされてきた。解釈者たちを悩ませてきた「社会的なもの」という概念を用いて構成された近代社会批判において、アレントが提起しようとした問題とは何だったのか。今後直近の課題としては、アレントによる近代社会批判の中でも、従来の研究では主題的に論じられなかった、「社会的なもの」による「私的領域」解体の論理を再構成することで、「社会的なもの」という概念を提起した彼女の問題意識の所在を解明するという問題に取り組みたい。ここで問いたいのは、「共通世界」の安定的な存立を支えるという意味で「世界的」性格を有する「私的領域」が、近代社会の中でいったいどのような力によって破壊されつつあるのか、またそのような力に抗って「私的領域」の安定的な存立を確保するための方途とは何かをめぐって、アレントがどのように考えていたのかという点である。

## 7. 主な引用・参考文献

### 【アレントの著作】

Arendt, Hannah, [1945] 1994, "Organized Guilt and Universal Responsibility," in *Essays in Understanding 1930-1954*, edited by Jerome Kohn, Harcourt Brace, 121-132. (=2002, J・コーン編, 齋藤純一・山田正行・矢野久美子共訳「組織的な罪と普遍的な責任」『アレント政治思想集成1 組織的な罪と普遍的な責任』みすず書房, 165-180.) (略号: OGUR)

———, [1950] 1994, "Social Science Techniques and the Study of Concentration Camps," in *Essays in Understanding 1930-1954*, edited by Jerome Kohn, Harcourt Brace, 232-247. (=2002, J・コーン編, 齋藤純一・山田正行・矢野久美子共訳「社会科学のテクニクと強制収容所の研究」『アレント政治思想集成2 理解と政治』みすず書房, 27-46.) (略号: STSC)

———, [1951] 1973, *The Origins of Totalitarianism*, New Edition with added Prefaces, Harcourt Brace & Company. (=1981, 大久保和郎・大島かおり訳『新装版 全体主義の起原』2・3, みすず書房.) (略号: OT)

———, [1953a] 1994, "Mankind and Terror," in *Essays in Understanding 1930-1954*, edited by Jerome Kohn, Harcourt Brace, 297-306. (=2002, J・コーン編, 齋藤純一・山田正行・矢野久美子共訳「人類とテロル」『アレント政

- 治思想集成 2 理解と政治』みすず書房, 109-121.) (略号: MT)
- , [1954] 1994, “On the Nature of Totalitarianism: An Essay in Understanding,” in *Essays in Understanding 1930-1954*, edited by Jerome Kohn, Harcourt Brace, 328-360. (=2002, J・コーン編, 齋藤純一・山田正行・矢野久美子共訳「全体主義の本性について——理解のための試論」『アーレント政治思想集成 2 理解と政治』みすず書房, 148-189.) (略号: ONT)
- , [1958] 1998, *The Human Condition*, 2nd ed., The University of Chicago Press. (=2007, 志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫.) (略号: HC)
- , [1958→1961] 2006, “The Crisis in Education,” in *Between Past and Future: Eight Exercises in Political Thought*, with an introduction by Jerome Kohn, Penguin Books, 170-193. (=1994, 引田隆也・斎藤純一訳「教育の危機」『過去と未来の間——政治思想への8試論』みすず書房, 233-264.) (略号: CE)
- , [1959a] 2006, “What Is Authority?,” in *Between Past and Future: Eight Exercises in Political Thought*, with an introduction by Jerome Kohn, Penguin Books, 91-141. (=1994, 引田隆也・斎藤純一訳「権威とは何か」『過去と未来の間——政治思想への8試論』みすず書房, 123-192.) (略号: WA)
- , [1959b] 2003, “Reflections on Little Rock,” in *Responsibility and Judgment*, edited and with an introduction by Jerome Kohn, Schocken Books, 193-213. (=2007, 中山元訳「リトルロックについての省察」『責任と判断』筑摩書房, 253-277.) (略号: RLR)
- , [1960a] 2006, “Freedom and Politics: A Lecture,” in *Between Past and Future: Eight Exercises in Political Thought*, Penguin Books, 142-169. (=1994, 引田隆也・斎藤純一訳「自由とは何か」『過去と未来の間』みすず書房, 193-232.) (略号: FP)
- , [1960c] 2002, *Vita activa oder Vom tätigen Leben*, Piper. (=2015, 森一郎訳『活動的生』みすず書房.) (略号: Va)
- , [1963a] 2006, *On Revolution*, Penguin Books. (=2007, 志水速雄訳『革命について』ちくま学芸文庫.) (略号: OR)
- , [1963b] 1994, *Eichmann in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil*, Penguin Books. (=1969, 大久保和郎訳『イェルサレムのアイヒマン——悪の陳腐さについての報告』みすず書房.) (略号: EJ)
- , [1964] 2003, “Personal Responsibility Under Dictatorship,” in *Responsibility and Judgment*, edited and with an introduction by J. Kohn, Schocken Books, 17-48. (=2007, J・コーン編, 中山元訳「独裁体制のもとでの個人の責任」『責任と判断』筑摩書房, 25-61.) (略号: PRUD)
- , [1965-1966] 2003, “Some Questions of Moral Philosophy,” in *Responsibility and Judgment*, edited and with an introduction by J. Kohn, Schocken Books, 49-146. (=2007, J・コーン編, 中山元訳「道徳哲学のいくつかの問題」『責任と判断』筑摩書房, 63-181.) (略号: SQMP)
- , [1968] 2003, “Collective Responsibility,” in *Responsibility and Judgment*, edited and with an introduction by J. Kohn, Schocken Books, 147-158. (=2007, J・コーン編, 中山元訳「集団責任」『責任と判断』筑摩書房, 195-208.) (略号: CR)
- , [1969] 1970, “Reflections on Violence,” in *On Violence*, Harcourt Brace and Company. (=2000, 山田正行訳『暴力について——共和国の危機』みすず書房, 97-175.) (略号: OV)
- , [1971a] 2003, “Thinking and Moral Considerations,” in *Responsibility and Judgment*, edited and with an introduction by J. Kohn, Schocken Books, 159-189. (=2007, J・コーン編, 中山元訳「思考と道徳の問題——W・H・オーデンに捧げる」『責任と判断』筑摩書房, 209-250.) (略号: TMC)

- , [1971b] 1972, “Thoughts on Politics and Revolution: A Commentary,” in *Crises of the Republic*, Penguin Books, 164-191. (=2000, 山田正行訳「政治と革命についての省察——一つの注釈」『暴力について——共和国の危機』みすず書房, 195-234.) (略号: TPR)
- , 1977, “Public Rights and Private Interests: In Response to Charles Frankel,” in Mooney, M., and Stuber, F., eds., *Small Comforts for Hard Times: Humanists on Public Policy*, The Columbia University Press, 103-108. (略号: PRPI)
- , 1979, “On Hannah Arendt,” in Hill, Melvyn, A., ed., *Hannah Arendt: The Recovery of The Public World*, St. Martin’s Press, 301-339. (略号: OHA)

## 二次文献（アレント研究その他）

### 【海外文献】

- Beiner, Ronald, 1982, “Interpretive Essay: Hannah Arendt on Judging,” in Beiner, Ronald, ed., *Lectures on Kant’s Political Philosophy*, Chicago University Press, 89-156, 164-174. (=1987, 浜田義文監訳「解釈的試論——ハンナ・アーレントの判断作用について」『カント政治哲学の講義』法政大学出版局, 133-238, 252-267.)
- Benhabib, Seyla, 1992, “Models of Public Space: Hannah Arendt, the Liberal Tradition, and Jürgen Habermas,” in Calhoun, Craig, ed., *Habermas and the Public Sphere*, MIT Press, 73-98. (=1999, 山本啓・新田滋訳「公共空間のモデル——ハンナ・アーレント、自由主義の伝統、ユルゲン・ハーバマス」『ハーバマスと公共圏』未来社, 69-101.)
- , 1995, “The Pariah and Her Shadow: Hannah Arendt’s Biography of Rahel Varnhagen,” in Honig, Bonnie, ed., *Feminist Interpretations of Hannah Arendt*, The Pennsylvania State University Press, 135-166. (=2001, 岡野八代・志水紀代子訳「パリアと彼女の影——ハンナ・アーレントによるラーエル・ファルンハーゲンの伝記」『ハンナ・アーレントとフェミニズム——フェミニストはアーレントをどう理解したか』未来社: 126-155.)
- , 1996, *The Reluctant Modernism of Hannah Arendt*, Sage Publications.
- Bernstein, Richard, J, 1986, “Rethinking the Social and the Political,” *Philosophical Profiles: Essays in a Pragmatic Mode*, Cambridge Polity Press, 238-259.
- , 2002, *Radical Evil: A Philosophical Interrogation*, Polity Press. (=2013, 阿部ふく子・後藤正英・齋藤直樹・菅原潤・田口茂訳『根源悪の系譜——カントからアーレントまで』法政大学出版局.)
- Canovan, Margaret, 1974, *The Political Thought of Hannah Arendt*, J. M. Dent & Sons. (=1995, 寺島俊穂訳『[新装版]ハンナ・アーレントの政治思想』未来社.)
- , 1992, *Hannah Arendt: A Reinterpretation of Her Political Thought*, Cambridge University Press. (=2004, 寺島俊穂・伊藤洋典訳『アレント政治思想の再解釈』未来社.)
- D’Entrèves, Maurizio, P., 1994, *The Political Philosophy of Hannah Arendt*, Routledge.
- Flathman, Richard E., 2005, *Pluralism and Liberal Democracy*, The Johns Hopkins University Press.
- Habermas, Jürgen, [1962] 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Neuwied, Luchterhand. (=1994, 細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換』[第2版]未来社.)
- , [1976] 1983, *Philosophical-Political Profiles: Studies in Contemporary German Social Thought*, The MIT Press, 171-187. (=1984, 小牧治・村上隆夫訳『哲学的・政治的プロフィール(上)——現代ヨーロッパの哲学者たち』未来社, 317-351.)
- Honig, Bonnie, 1995, “Toward an Agonistic Feminism: Hannah Arendt and the Politics of Identity,” in Honig, Bonnie, ed., *Feminist Interpretations of Hannah Arendt*, The Pennsylvania State University Press, 135-166. (=2001, 岡野八代・志水紀代子訳「アゴニスティック・フェミニズムに向かって——ハンナ・アーレントとアイデンティティの政治」

- 『ハンナ・アーレントとフェミニズム——フェミニストはアーレントをどう理解したか』 未来社, 194-239.)
- Jay, Martin, 1978, “Hannah Arendt: Opposing Views,” *Partisan Review*, Vol.45, No.3, 348-368. (=1989, 今村仁司・藤澤賢一郎・竹村喜一郎・笹田直人訳「ハンナ・アレントの政治的実存主義」『永遠の亡命者たち——知識人の移住と思想の運命』新曜社, 398-430.)
- Kateb, George, 1983, *Hannah Arendt: Politics, Conscience, Evil*, Rowman & Allanheld.
- , 1994, “Arendt and Individualism,” *Social Research*, Vol.61, No.4, 765-794.
- , [2007] 2010, “Existential Values in Arendt’s Treatment of Evil and Morality,” in Benhabib, Seyla, ed., *Politics in Dark Times: Encounters with Hannah Arendt*, Cambridge University Press, 342-373.
- Mewes, Horst, 2009, *Hannah Arendt’s Political Humanism*, Peter Lang.
- Pitkin, Hanna, Fenichel, 1981, “Justice: On Relating Private and Public,” *Political Theory*, Vol. 9, No. 3, 327-352.
- , 1995, “Conformism, Housekeeping, and the Attack of the Blob: The Origins of Hannah Arendt’s Concept of the Social,” in Honig, Bonnie, ed., *Feminist Interpretations of Hannah Arendt*, The Pennsylvania State University, 51-81. (=2001, 岡野八代・志水紀代子訳「画一主義、家政、そしてブラッブの襲撃——ハンナ・アーレントにおける社会的なるものという概念の起源——」『ハンナ・アーレントとフェミニズム——フェミニストはアーレントをどう理解したか——』未来社, 79-125.)
- , 1998, *The Attack of the Blob: Hannah Arendt’s Concept of the Social*, Chicago University Press.
- Tsao, Roy, [2002] 2006, “Arendt against Athens: Rereading The Human Condition,” in Williams, Garrath, ed., *Hannah Arendt: Critical Assessments of Leading Political Philosophers*, Vol. I, Routledge, 359-386.
- Villa, Dana, Richard, 1996, *Arendt and Heidegger: The Fate of the Political*, Princeton University Press. (=2004, 青木隆嘉訳『アレントとハイデガー——政治的なものの運命』法政大学出版局.)
- , 1999, *Politics, Philosophy, Terror: Essays on the Thought of Hannah Arendt*, Princeton University Press. (=2004, 伊藤誓・磯山甚一訳『政治・哲学・恐怖——ハンナ・アレントの思想』法政大学出版局.)
- , 2008, *Public Freedom*, Princeton University Press.
- Young-Bruehl, Elisabeth, 1984, *Hannah Arendt: For Love of the World*, Yale University Press. (=1999, 荒川幾男・原一子・本間直子・宮内寿子訳『ハンナ・アーレント伝』晶文社.)
- , 2006, *Why Arendt Matters*, Yale University Press. (=2008, 矢野久美子訳『なぜアレントが重要なのか』みすず書房.)
- Zaretsky, Eli, [1995] 1997, “Hannah Arendt and Meaning of the Public/Private Distinction,” in Calhoun, Craig, and McGowan, John, eds., *Hannah Arendt and Meaning of Politics*, University of Minnesota Press, 207-231. (=2001, 伊吹浩一訳「ハンナ・アーレントと公的なもの/私的なものの区別の意味」『ハンナ・アーレントを読む』情況出版, 230-255.)

## 【国内文献】

- 阿部里加, 2013, 「アレントの家庭教育観——「世界への愛」の基盤を問う——」『理想』 第 690 号, 96-104.
- , 2016, 「この世界を批判する主体はいかにして成り立つか——アレントの観察の条件」『危機に対峙する思考』梓出版社, 408-428.
- 石田雅樹, 2009, 『公共性への冒険——ハンナ・アーレントと《祝祭》の政治学』勁草書房.
- , 2012 「ハンナ・アーレントにおける『政治』と『教育』——シティズンシップ教育の可能性と不可能性——」『宮城教育大学紀要』 第 47 号, 27-36.
- , 2017, 「ハンナ・アーレントにおける「政治」と「責任」——全体主義体制下における普通のドイツ人

- の責任について」『政治思想研究』第17号, 234-260.
- 伊藤洋典, 1989, 「H・アレントにおける共同性の探求——『仕事』・『労働』・『活動』の概念を中心として」『政治研究』第36号, 107-160.
- , 2001, 『ハンナ・アレントと国民国家の世紀』木鐸社.
- 市野川容孝, 2006, 『社会』岩波書店.
- , 2010, 「社会的なもの、政治的のもの、文化の文節と接合——近現代のドイツを例として」『社会思想史研究』第34号, 69-84.
- 市村弘正, 2007, 『[増補] 敗北の20世紀』ちくま学芸文庫.
- 稲葉振一郎, 2008, 『「公共性」論』NTT出版.
- , 2017, 『政治の理論——リベラルな共和主義のために』中公叢書.
- 井上達郎, 2017, 「アレント思想における『私的領域』概念の存立意義——『私有財産』論に着目して——」『現代社会学理論研究』第11号, 81-93.
- , 2018, 「アレント『私的領域』概念における『個人的なもの』の位相——全体主義論から道徳哲学論へ——」『立命館産業社会論集』第54巻第2号, 15-35.
- , 2019, 「子どもの『新生』を通じた『世界』の再生と持続——H・アレント『保守的』教育論の思想的含意——」『立命館産業社会論集』第54巻第4号, 67-86.
- 今出敏彦, 2013, 『ハンナ・アレントの『人間の条件』再考——世界への愛——』近代文藝社.
- 大澤真幸, [2015]2018, 『自由という牢獄——責任・公共性・資本主義』岩波書店.
- 岡野八代, 1997, 「法の『前』」『現代思想』第25巻第8号, 224-239.
- , 2001, 「暴力論再考——アレントに抗して、アレントとともに」『ハンナ・アレントを読む』情況出版, 132-152.
- , 2009a, 「家族の時間・家族のことば——政治学から／政治学への接近の可能性」『現代思想』第37巻第2号, 180-199.
- , 2012, 『フェミニズムの政治学——ケアの倫理をグローバル社会へ』みすず書房.
- 金刺亮介, 1993, 「私有財産と私的領域——ハンナ・アレントの私有財産論」『法哲学年報』, 127-135.
- 亀喜信, 2010, 『ハンナ・アレント——伝えることの人間学』世界思想社.
- 川崎修, 2010a, 『ハンナ・アレントの政治理論 アレント論集Ⅰ』岩波書店.
- , 2010b, 『ハンナ・アレントと現代思想 アレント論集Ⅱ』岩波書店.
- 木前利秋, 2008, 『メタ構想力——ヴィーコ・マルクス・アレント』未来社.
- 金慧, 2011, 「自律と所有——自己尊重の社会的基盤をめぐる——」, 須賀晃一・齋藤純一編『政治経済学の規範理論』勁草書房, 117-132.
- 小玉重夫, 1999, 『教育改革と公共性——ボウルズ=ギンタスからハンナ・アレントへ』東京大学出版会.
- , 2001, 「始まりの喪失と近代——アレントにおける出生と教育」『ハンナ・アレントを読む』情況出版, 153-163.
- , 2013, 「ハンナ・アレントとベーシックインカム——脱冷戦的思考の方へ」『理想』第690号, 50-61.
- , 2013, 『難民と市民の間で——ハンナ・アレント『人間の条件』を読み直す』現代書館.
- 小山花子, 2013, 「不服従——政治的あるいは道徳的——」『理想』第690号, 62-73.
- 齋藤純一, 1997, 「表象の政治／現われの政治」『現代思想』第25巻第8号, 158-177.
- , 2000, 『公共性』岩波書店.

- , 2005, 『自由』岩波書店.
- , 2008, 『政治と複数性——民主的な公共性にむけて』岩波書店.
- 笹沼弘志, 2008, 『ホームレスと自立／排除——路上に〈幸福を夢見る権利〉はあるか』大月書店.
- 佐藤和夫, 1997, 「かけがえのなさの思想家としてのアーレント——『アーレント・ルネッサンス』と現代文化」『唯物論研究年誌』第2号, 230-240.
- , 2003, 「家族・親密圏・公共性——H・アーレントの公私観の視角から」山口定・佐藤春吉・中島茂樹・小関素明編『新しい公共性——そのフロンティア』(立命館大学人文科学研究所研究叢書第16輯)有斐閣, 59-80.
- , 2004, 「親密圏を根圏として脱構築する」『唯物論研究年誌』第9号, 8-38.
- , 2006, 「近代を批判するジェンダー理論のために」『唯物論研究年誌』第11号, 36-62.
- , 2017, 『〈政治〉の危機とアーレント——『人間の条件』と全体主義の時代』大月書店.
- 佐藤春吉, 2003, 「H・アーレントと公共空間の思想——J・ハーバーマスの視点を交えて」『新しい公共性——そのフロンティア』有斐閣, 30-58.
- , 2004, 「ハンナ・アーレントはなぜ見直されているのか——その魅力と問題点」『唯物論研究年誌』第9号, 230-252.
- 高橋若木, 2013, 「プライベートな“現れ”: アーレントを今読む意味」『理想』第690号, 84-95.
- 田中智輝, 2016, 「教育における『権威』の位置——H. アーレントの暴力論をてがかりに——」『教育学研究』第83巻第4号, 461-473.
- 田中智志, 2009, 「希望の肯定性——教育哲学の論じられなかったテーマ——」『教育哲学研究』一〇〇号記念特別号, 361-376.
- 千葉眞, 2005, 「アーレントにおける私的なものに関する一考察」『季刊 iichiko』第87号, 85-93.
- 中村健吾, 2014, 「境界線を引きなおして他者を迎え入れる——公共圏、親密圏、シティズンシップ」田中紀行・吉田純編『モダニティの変容と公共圏』京都大学学術出版会, 97-121.
- 中山元, 2017, 『アーレント入門』ちくま新書.
- 朴順南, 2007, 「ハンナ・アーレントにおける『世界』概念——教育と権威の位置づけをめぐる——」『哲学』第115集, 25-43.
- 前川玲子, 2014, 『亡命知識人たちのアメリカ』世界思想社.
- 牧野雅彦, 2015, 「アーレントと『根源悪』——アイヒマン裁判の提起したもの——」『思想』第1098号, 50-80.
- 宮寺晃夫, 2007, 「政治学と教育学は出会えるか——アーレントの『統合教育批判』を読む——」『近代教育フォーラム』第16号, 221-231.
- , 2009, 「自由を／自由に育てる——『教育の私事化』と公共性の隘路——」『自由への問い5 教育——せめぎあう「教える」「学ぶ」「育てる」——』岩波書店, 75-99.
- 百木漠, 2018, 『アーレントのマルクス——労働と全体主義』人文書院.
- 森川輝一, 2010, 『〈始まり〉のアーレント——「出生」の思想の誕生』岩波書店.
- 森分大輔, 2007, 『ハンナ・アーレント研究——〈始まり〉と社会契約』風行社.
- 山本哲士, 2005, 「『パブリックなもの』と『ソーシャルなもの』の対立」『季刊 iichiko』第86号, 28-56.
- 山本理顕, 2015a, 「権力の空間／空間の権力——個人と国家の〈あいだ〉を設計せよ」講談社選書メチエ.
- , 2015b, 「『個人と国家の〈間〉を設計せよ』を語る」『季刊 iichiko』第125号, 6-36.
- 吉澤夏子, 2012, 『「個人的なもの」と想像力』勁草書房.
- 吉田傑俊・佐藤和夫・尾関周二編, 2003, 『アーレントとマルクス』大月書店.